

Feature

SGH ASSOCIATE

本校のSGH活動を 国際協力機構(JICA中部)の訪問団が視察

「校内巡回ツアー」で 独自の学習施設・環境を紹介

本校におけるスーパーグローバルハイスクール(SGH)アソシエイトの取り組みを紹介するとともに、世界各国から集まったグローバル・リーダーとの交流を通して、国際的視野を育成することを目的に開催された「Students and Global Leaders: Talking about Sustainable Development」。会場となったALL(アクティブラーニングラボ)で来校者の到着を待つ間、緊張を隠しきれない様子だった生徒たちですが、イベントが始まり最初のプログラムとなる「校内巡回ツアー」がスタートすると、その表情も少しずつ柔かくなっていきました。

「校内巡回ツアー」では、生徒3名とJICA中部の外国籍産業技術研修生3名がひとつのグループになって校内の各施設を巡回。アトリウム、電子図書館、WOC(ワールドオンライン教室)、理科実験室など、SGHアソシエイト活動で活用されている独自施設の特徴や利用法を中心に、本校が誇る学校環境について日頃の学習で培った英語で説明。生徒の言葉に熱心に耳を傾け、積極的に質問を投げかけていたJICA中部の外国籍研修生からは「素晴らしい」という言葉が何度も聞かれました。また、和室を訪れた際にはJICA中部の外国籍研修生の方が熱心に日本文化について尋ね、中学生の授業が行われていた美術室を訪れた際には、記念撮影に応じてコミュニケーションを楽しむなど、終始、和やかな雰囲気包まれていたことがとても印象的でした。❶



▲「校内巡回ツアー」では生徒自身が学習施設・環境を紹介。

SGHアソシエイト活動の内容を 生徒たちがプレゼンテーション



▲大型スクリーンを使って本校のSGHアソシエイト活動を紹介。

校内巡回ツアーを終えてALLに戻ると、代表生徒による本校のSGHアソシエイト活動のプレゼンテーションが行われました。最初に登場したのは中高一貫4年生の近藤穂佳さん。「『SOCIAL ACTION!』で持続可能な開発を担う人材育成プロジェクト」の全体概要とともに、①「多文化共生と減災」、②「経済活動と貧困」、③「社会生活と循環」という3つのテーマを示し、企業・団体など外部組織と連携しながら社会問題に対して積極的にアプローチしていることを紹介しました。

「スピーチや資料に英語を盛り込むなど、もう少し工夫ができれば良かった」と振り返ってくれた近藤さん。それでも、発表を担当した「多文化共生と減災」の活動の説明では、被災地に必要な物資として携帯用トイレの製作に取り組み、外国人被災者の支援も想定してデザインを考慮していることを堂々とプレゼンテーション。また、オープンキャンパスで来校した子どもたちを対象にした地震体験、消防署での救命講習の受講など、地域ぐるみで行う減災活動についても報告し、「被災時に外国人も救えるよう、救命時に英語でコミュニケーションができることを目標にしている」と決意を語りました。

続いて「経済活動と貧困」での取り組みについて発表した普通科進学コース1年生の松木竜君は、「準備時間が限られていたこともあって緊張しましたが、外国人の方の前で発表する貴重な機会になりました」と満足そうな表情を見せました。プレゼンテーションではフェアト

レード(FT)に関して、さまざまな角度から学びを深めていることを報告。サスティナブル・コーヒーを取り扱うAoyagi Coffee Factoryの協力を得て『Kokusai Friend Coffee』を開発して光楓祭で販売したこと、また、認定NPO法人アイキャンへのインタビューなど校外でのフィールドワークにも積極的に参加していることを、大型スクリーンを利用して効果的に伝え、「今後も多角的に研究を重ね、FTの普及活動を進めていきます」と今後の活動への意気込みをアピールしてくれました。

最後に発表した中高一貫4年生の藤井峻太君は、「社会生活と循環」についての活動内容を披露。「弁当の中身はどこから来る?」、「フードマイレージを計算しよう」など、全校で取り組んだワークシートによるアクティビティのほか、国際理解研修での訪問地で実施した「異文化理解フィールドワーク〜外国人に聞いてみよう〜」、エコグッズ開発など本校独自の活動を自信に満ちた表情で紹介。「今後も名古屋国際高校の生徒として、たくさんの国の人と交流し、さまざまな経験から得た知識を活かして、校訓である『フロンティアスピリット(開拓者精神)』を胸に抱き、国際社会に貢献していきたい」という結びの言葉に、参加者から大きな拍手が起こりました。

生徒による発表の後にはAoyagi Coffee Factory代表の青柳信弥さんも登壇し、「高校生と一緒に活動することが、自分にとって良い勉強になっている」とスピーチ。休憩時間には、たくさんのJICA中部の外国籍研修生がコーヒープレイクを楽しんでいました。❷



▲「Aoyagi Coffee Factory」代表の青柳信弥さん。

JICA中部の訪問団参加国
ブラジル、カンボジア、エジプト、ガーナ、ケニア、メキシコ、ミャンマー、ペルー、ソロモン、スリランカ、スウェーデン、タンザニア、ジンバブエ

“理想の地球”をともに描く グループアクティビティに挑戦



▲「理想の地球」を描いたグループアクティビティの様子。

プレゼンテーションを終え、10分間の休憩をはさんで生徒たちが取り組んだのはグループディスカッション。国籍、趣味、社会的関心などを書き込んだ自己紹介シートでお互いを理解すると、「理想の地球」について各自が意見を出し合って絵を描き、生徒たちは「その実現のために自分にできること」を、JICA中部の外国籍研修生は「その実現のために若者に伝えたいメッセージ」を付箋に書いて貼り、発表し合いました。

「初めは戸惑う場面もありましたが、“理想の地球”を目指すアプローチが国によって異なることが分かり、とても楽しかった」と話してくれた藤井君。環境という視点から理想の地球について考えていたケニア人研修生、経済に視点を置いた意見を述べたペルー研修生など、国籍によって問題意識の違いがあることを知り、日本人である自分にとって当たり前のことが、そうではない国があることを気づかせてくれたといい、「直に顔を合わせて対話することでより理解が深まりました。“常識”を疑うことの大切さを学ぶことができ、今後のSGHの活動につながる良い機会になりました」と笑顔を見せます。同様に「日本に暮らしている自分には想像できない、さまざまな意見に触れることができて良かった」と振り返るのは近藤さん。「『ゴミのポイ

捨てをやめるべき』と強調するウガンダ人研修生の提言に、初めはその意図が理解できなかったけれど、対話し続けることで“感染症の危険”という現実の課題が見えてきた」といい、「主張の真意が自分の中で明らかにになれば、自信を持って人に伝えることができ、行動にも移しやすくなる」と目を輝かせます。一方、松木君は英語を使ってコミュニケーションをする楽しさを実感したと話します。「英語はあまり得意ではないけれど、自分から積極的に疑問を投げかけることで有意義なディスカッションができたと思います」と、世界各国にルーツを持ったグローバル・リーダーとの積極的な対話が、松木君の今後のSGHアソシエイト活動への意欲を高めてくれた様子です。

SGHアソシエイト活動を通じて、「これまでは無関心だったことに興味生まれ、視野も広がった」、「社会で活躍する方の話を聞き一緒に活動する貴重な経験から、自分は将来どのように社会と関わっていきたいのかをイメージできるようになった」、「たくさんの人の前でプレゼンテーションをする機会が増え、物怖じすることなく自信を持って発言できるようになった」と、それぞれに変化や成長を実感している生徒たち。これから「世界中の人にFTへの関心を持ってもらえるような活動を続けていきたい」(松木君)、「国際的な活動に取り組む他の学校と交流して、いろいろな意見を交換したい」(藤井君)、「SGHアソシエイト活動で学んだことを、校外スピーチコンテストなど個人の活動にもリンクさせたい」(近藤さん)という目標に向かって、全力でSGHアソシエイト活動に取り組みます。❸



▲左から／近藤穂佳さん(4年)、藤井峻太君(4年)、松木竜君(1年)。

学びにおいて一番重要な はモチベーションである



名古屋商科大学
経済学部 准教授
伊藤 博先生

去る11月5日(木)、名古屋国際中学校・高等学校にて実施されたイベント「Students and Global Leaders: Talking about Sustainable Development」に参加した。JICA中部の方からアフリカ、中南米、太平洋諸島、アジアなど13か国より15名の訪問者があり、5つのグループに分かれて18名の生徒と交流が図られた。その中でもメインとなったのが「Social Action!」と呼ばれる持続可能な開発のための人材育成にむけたアクティビティであった。学生と訪問者は協働で環境や食料など様々な問題について討論した。

まずこのようなイベントが実施される事自体、いかに国際的な教育環境が整備されているかを示している。グローバル化に対応すべくイニシアティブを取れる教員が複数いるからこそ出来る事であろう。語学が出来る生徒も多かったが、語学の出来ない生徒もコミュニケーションを取るという意欲が感じられた。確かに言葉は大事であるが全てではない。学びにおいて一番重要なのはモチベーションである。

一つお願いするとなれば、プレゼンテーションを楽しく行ってほしい、ということである。これにはいくつかの理由がある。まず発表者は難しい内容のものを「いかに楽しくするか」というプロセスの中で内容に対する本当の理解を求められる。ここで発表者の考える力が養われる。また観衆にとっても発表者が自信を持って何を話しているのかが分かるようになる。そして何より観衆が注目する。いかに大切な内容でも観衆が聞いていなければ意味がない。

いずれにせよ、このような革新的な高校が日本に存在するのは喜ばしい事である。このまま突き進んで行ってほしい。❶

